

平成二十七年年度 中学入学試験 問題用紙 (第一回)

国語

□ 次の文章を読んであとの問いに答えなさい。

世界の果てにある、小さな食堂を舞台にした物語を書こうと思っていた。ずっと前からその食堂は私の頭の中にあって、①夜になると頭の中の物語に暖かい灯がともった。客のざわめきが聞こえ、食堂の上に広がる夜空まで見えた。

A いざ机に向かって原稿用紙をひろげると、いっさいが消えてなくなってしまった。一行として書けなかった。いくら頭をかきむしつてみても書けないので、仕方なく毛布をかぶってふて寝をしたら、夢の中に当の食堂があらわれ出た。登場人物たちが生き生きと動きまわっている。夢の中と知りながらも「あっ」と言って起き上がり、大急ぎで夢の中の机に向かうのだが、ペンを握りしめたとたん食堂の灯りが消えてしまった。

このくり返し。

B 私は、 C どおり寝ても覚めても、その物語を書き出すことができなかった。

「それはもう、何かきつかけをつかむより他ないね」

②ゴンベン先生に相談してみたら、そのようなお答えであった。ゴンベン先生というのは私の恩師であり、某大学の助教授を務めながら、文学から哲学書にいたるまで多岐にわたる翻訳の仕事を通じてこられた博識の上ない先生である。

「読む」「記す」「D」じる」の言偏ごんべん三本柱をはじめ、「話」「語」「註」「訳」「評」「詩」に至るまで。私はゴンベンをま擁するあらゆる領域をこの先生に教わって来た。

「このころ、すっかり頭髪の方は③白組が優勢だね」

そう言って先生はネクタイをゆるめ、好物の黒ビールをちびちび召し上がる。

先生に会うのは、横浜は野毛町にある小さな串焼き屋の片隅と決まっていた。生粋まろのハマツ子である先生のなわばりなのだ。

(中略)

ゴンベン先生に会いにゆくときは、渋谷から東横線に乗って桜木町まで行くことになる。急行だと35分で着くのだが、この35分が絶好のタイムであることに気がついた。

30分では近すぎる。でも、急行で40分もかかるのでは遠いようで気が乗らない。

そこへいくと35分というのは、ちょうどいい頃合で、切符代も290円と格安だった。行って帰って580円。タクシーの1メーターより安い。のだからE。

最初は先生に会うときだけ、この35分を味わっていたのだが、そのうちふらりと机を離れ、昼の日なかから横浜に行くようになってしまった。行ってどうするでもない。

ただ東京の日常と35分だけずれた場所の妙味でも言えはいいか。あてどなく歩いては立ち止まり、古ぼけたビルだの、ひとけのない路地だのをぼんやり観察していた。そんなことばかりしていると「こんなことしている場合ではない」と思うのだが、机に戻ったら戻ったで、机にかじりついていても何も始まらないと思ってしまう。だから35分を行ったり来たりし、それでいつか、ふっと物語のしつぽをつかまえないかと企んだのだ。

が、なかなかさううまくいかなかった。

うまくいかない、夕方を待って、ゴンベン先生をお呼びたてし、また串焼きのケムに巻かれながら教えを乞うた。先生は混乱しかけている私の頭をいともきれいに④掃除してくれた。

「吉田君な、君はその、なんとかいう食堂の話を書きたいんだっけな？」

「そうです。世界の果てみたいところにある食堂で……」

「で、その主人公は？」

「ええと……とくべつ主人公というのはいなくて、たぶんその店に集まるいろんな人の話を書きたいんです」

それは、そう思っていた。食堂を書きたいのではなく、客人たちのことを書きたかったのだ。

「して、その客人たちの何を書きたいのだろうな？」

「さあて……なんでしょうか？」

そこで先生は黒ビールのコップをコツンと置き、口をFの字に曲げて、串焼き屋の煤けた天井を見上げた。

「世界の果てにある食堂で、人々は絶望しているのかねえ？」

「いえ……たぶん彼らは、ささやかながら希望を持っているような気がします。希望と言うか……夢と言ひ替えてもいいんですが」

「夢か。夢ってもんは、そのままそこにあればなかなかいいもんだがね。人が寄りかかったとたん(⑤はかない)という字になるね。誰が考えたことやらなあ」

私は頭の中の黒板に(はかない)と書いてみた。たしかにそのとおりだった。その一瞬、ゴンベン先生がニンベン先生に変身していた。

「はかない客人たちの物語ということだねえ」

そのとき、先生の言う「きつかけ」の一、二行が、頭にパチパチ明滅したような気がした。

よし、これで書ける。そう思い、そそくさと先生に「ではまた」と一礼し、しつぽを——その一行を——ポケットに暖めながら桜木町駅まで足早に歩いた。

駅向こうの、それこそ夢のような大観覧車を見届け、きつちりと35分。

まっすぐ東横の「G横」から「H東」へと帰還し、午後9時の渋谷駅の雑踏にもみくちゃになったとたん、⑥たしかにポケットにしまったはずのしつぽが、どこかへ消えてなくなっているのに気付いた。握りしめているのは290円の切符ばかり。

⑦馬車はかばちやに戻される。それが物語の鉄則なのだった。

*1 擁する……いづく。かかえる。

(吉田篤弘『フィンガーボウルの話の続き』新潮文庫による)

問一 傍線部①「夜になると……とまった。」とはどういうことですか。

ア 分かりやすく説明しているものを次のア～エの中からひとつ選び、記号で答えなさい。

イ 毛布をかぶれば食堂の夢が現実になること

ウ 夜中であればいきいきとした小説が書けること

エ 世界の果てには夜に開く食堂が存在していること

エ 夢の中では具体的に物語が出来上がっていること

問二 本文中の **A**、**B** にあてはまることを次のア～オの中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

ア しかも イ たとえば ウ つまり エ ところが オ なぜなら

問三 本文中の **C** にあてはまることを漢字二文字で書き、「そのとおり」「そのまま」という意味になるようにして答えなさい。

問四 傍線部②について、主人公が恩師をこのように呼ぶ理由を三十字程度で説明しなさい。

問五 **D** に本文の内容をふまえ、あてはめるのにふさわしい漢字を考え、一字で答えなさい。

問六 傍線部③とはどういうことですか。その内容を十五字程度で簡潔に説明しなさい。

問七 **E** にあてはまる言葉として最もふさわしいものを次のア～エの中からひとつ選び、記号で答えなさい。

ア 申し分ない イ 申し訳ない ウ 元も子もない エ 物足りない

問八 傍線部④と同じような意味に当たることばを次のア～エの中からひとつ選び、記号で答えなさい。

ア 合成 イ 保存 ウ 整理 エ 消去

問九 **F** にあてはまる言葉を一字で答えなさい。

問十 本文のことばを参考にして、傍線部⑤を漢字に直しなさい。

問十一 傍線部 G・H が示す地名を、それぞれ本文中から抜き出して答えなさい。

問十二 傍線部⑥は何をたとえたものですか。

「ポケット」と「しっぽ」の示すものが、それぞれ何であるか分かるようにした上で三十五字以内で説明しなさい。

問十三 傍線部⑦とはどういうことですか。最もふさわしいものを次のア～エの中からひとつ選び、記号で答えなさい。

ア 描いた夢の世界が逃げてしまうこと

イ 時間が来るとかけた魔法が解けてしまうこと

ウ 夢と現実がごちゃ混ぜになっていること

エ 自分の力ではどうにもならない何かがあること

二 次の各問に答えなさい。

A 漢字の問題

問一 部のカタカナを漢字になおしなさい。

① コンセントを電源にセツヅクする。

② 大勢の人でコンザツする駅。

③ 霧でシカイが悪く、前が見えない。

④ 植えていた朝顔がやっどハツガした。

⑤ 池にエサをまくと魚がムラがる。

問二 部の漢字の読み方をひらがなで書きなさい。

① 真つ青な遠浅の海で泳ぐ。

② 海外を旅して見聞を深める。

③ 赤ん坊に太郎と命名する。

④ 実在の人物を描いたドラマ。

⑤ 白い壁の家屋が建ち並ぶ街。

B 慣用句・ことわざの問題

問三 □にあてはまる色を漢字一字で答え、ことわざを完成させなさい。

- ①くちばしが□色い || 未熟であること
- ②隣の芝生は□い || 他人のものはよく見えること
- ③□息吐息 || 非常に困ったときに出す元気のないため息
- ④朱に交われれば□くなる || 人は周囲の影響を受けやすいこと
- ⑤□羽の矢が立つ || 多くの人の中から特に選び出されること

C 語句の用法・文法の問題

問四 次に挙げる言葉を正しく用いている文はどれか、正しいものをひとつ選び、記号で答えなさい。

①志向

- ア王妃はぜいたく志向だったので税金を湯水のように使った。
- イ議員たちは互いに深く志向して法律を変えることにした。
- ウ新製品を作り出すために何度も何度も志向を繰り返した。
- エ新しい法律が志向されてすでに一ヶ月が経とうとしている。

②感傷

- ア両親がなにかと感傷してくるので自立できないと悩む兄。
- イ美しい絵を感傷していると、吸い込まれそうな気分になる。
- ウライバル校に大差で感傷できたことは非常に嬉しい。
- エほろ苦い感傷にひたるのは今日までにしておこう。

③占める

- ア最後の仕上げにかかるので、気を引き占める。
- イ雨風が吹き込んだのであわてて窓を占める。
- ウ閉店時刻になったので今日の売り上げを占める。
- エ裁判を聴きに来た人の半数を報道陣が占める。

④断つ

- ア他の国と交流を断つことは我が国にとって大きな損害となる。
- イ切れ味の良いはさみでリズムカルに布を断つデザイナー。
- ウ砂漠で消息を断つ心配がないよう、装備に工夫する。
- エ予算さえおれば計画がうまくいく見通しが断つというものだ。

⑤介抱

- ア閉じ込められた人質は、警察の活躍で無事に介抱された。
- イ具合が悪くなった友人を介抱していてバスに乗り遅れた。
- ウリハビリに励んだからはずいぶん病状が介抱に向かいましたね。
- エ広々とした高原に来ると誰でも介抱的な気持ちになる。